

天明六年の由來書に云ふ。光覺寺中受教院・心教院之兩寺中、請地之内に建立有之處、後退轉。とあり。

○妙香山善導寺

淨土宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基旦那者、金澤尾張町高岡屋次郎兵衛と申者也。此者先祖小西次郎兵衛は、生國越前府中之者にて有之處、高德公府中より被召連當地に罷越、藥種商賣御用相勤。瑞龍公御家督後、富山・高岡等御供仕、御用相勤。慶長九年高岡にて病死仕。二代次郎兵衛金澤へ罷越、尾張町に居住仕。微妙公之御代、能州諸橋之海中に光出現し、尉之面一面網にて引揚。御國不離之面と申事故、不思議に手に入所持罷在に付、藩公へ指上度旨奉願、則指上候處、町奉行葛卷隼人・長瀬五郎右衛門執次にて、不依何可奉願旨被仰渡、寺屋敷拜領被仰付候はゞ一字建立仕度と相願候處、則願之通被仰出、寛永十六年山之上町の内歩數二千三百九拾七步拜領被仰付、寺建立仕候。右地方御奉行衆折紙于今所持仕。とあり。右折紙は、明治十六年十二月十五日寺中より出火、此寺共に類焼し、其の寫も残らずとぞ。さて右寺建立の來歴、國事雜抄

には、御家に有之白鬚の面は、能州富木浦松が下に大城岩の根にはさまり、藻屑にかゝり有之を、海人海底より取上げたり。折節金澤の町人高岡屋某といふ者参り隠り、鳥目二貫文に買請候て、微妙公へ指上げたり。公甚御喜悅遊され、御褒美に何にても望候様被仰出處、他國にて求めたる物にても無御座、御領國にて取上げたる品に候へば、只指上度旨申上げ、尤なる申やう也。それとも何にても望候様にて被仰出故、左候はゞ私兼てより檀那寺一寺建立仕度、何卒寺地拜領仕度旨奉願處、則願之通寺地拜領被仰付、永代相違有之間敷旨被仰出、高道油木山の下にて被下之。則寺建立致し、親之法名をば寺號に仕、善導寺と號す。今之山之上町善導寺是也。といへり。又善導寺開山生蓮社良往露滴上人、明曆元年五月七日入寂、開基小西宗齋寛永廿年正月九日寂すと、善導寺記に記載せり。尙其の創立の來歴等の巨細は、藥師緣記に載せたり。

○善導寺藥師如來並白鬚面來歴

妙香山藥師緣記に云ふ。茲に小西宗齋と云ふあり。父は小西治郎兵衛といへり。越前國府中に居住し、藥店を家業と

す。故に大納言利家卿、いまだ府中城にましませし頃、藥種の御用を承りけり。小西治郎兵衛元龜元年に一男を生む。童名を治三郎と號す。然るに天正四年の三月、治郎兵衛病におかされ歿す。于時治三郎僅に六歳なりしが、幼少にて父母に分れ孤兒と成り、親族なる醫師佐藤順庵方へ移住し、醫學を學び、十五歳の春小西宗齋と名乗りたり。廿三歳の春別家をなし、亡父の遺跡を慕ひて藥店を開き、之を家業となし、小西治郎兵衛と改稱す。常々藥師如來を信仰せしゆゑ、藥師の尊像をば感得し、此像を安置して殊に尊崇せし處、能登國に至り、奥郡前波村道化山の向うの出崎なる濱邊に、諸橋の一本木とて名高き靈木あり。此下なる海岸に翁の面あり。此面は住吉の御作にして、白鬚明神の尊面なり。故有りて此浦に沈みける事年久し。今汝に結縁し給ふ尊面なれば、今宵其所に至るべしと、諺の聲の如く聞え、且光明の奇瑞ありて、靈驗新たなる告を蒙りけるゆゑ、道化山の尾崎なる濱邊に到り親ひける處、夜五つ時頃、不思議なる哉岩間に諺の聲有りて光を放ち給ふ。宗齋藥師如來の鑿託を感得せしに違はざれば、一人の男子を頼

み、一本木の下にて尊面を得たりけり。彼諺の音聲を聞き得けるに、則白鬚の諺言なりしかば、是白鬚明神の尊面なりしこと知られ、且沫を吹き論ひ給ふゆゑに、沫吹の尊面とぞ稱しける。頃は寛永十三年九月の事なりしが、同十八日の曉、小西宗齋急ぎ金澤へ來り、詳かに其次第を御聽に達し、彼尊面をば献上なし奉りけり。太守聞召され甚だ大悦し給ひ、御秘藏あらせられ、御喜悅の餘り、小西宗齋儀望の趣あらば可申出旨、町奉行葛卷隼人・長瀬五郎右衛門を以て、御懇の御意を蒙りけり。宗齋難有存じ奉り、望の儀無御座旨申上ける處、いづれも奉願候へとの御事なるゆゑ、左候はゞ何とぞ一寺を建立して天下泰平國家安全を祈り申度、就ては右寺地拜領仕度旨言上す。太守聞召され、尤之願なりと御滿悅遊ばされ、則卯辰高道通り油木山の内三千步拜領仰付けられたり。宗齋甚だ歡喜し、彌一寺建立の催しをなしける處、寛永十六年の春、地方御奉行近藤新左衛門・別所勘右衛門・坂田源兵衛檢分にて寺地打渡され、拜領の寺屋敷を請取りけり。さて念願の如く一寺を創立して、別に小堂を造立し、靈佛の藥師如來・十二神將の尊像